

田原本町住民協議会 中間取りまとめ ～地域のつながりづくり～

1.全体の概要

第1回、第2回の会議では、「地域のつながり」に関わる4分野(健康・長寿介護・防災・コミュニティ)それぞれの現状や解決策を議論してきました。第3回からは視点を広げ、各取り組みに共通する重要課題として、以下のテーマに分けて議論を行います。

2.課題と提案の分類

テーマ	課題
テーマA:情報・認知に関する課題	課題①:知らないままになっている 課題②:情報はあるが、届いていない 課題③:情報が“自分ごと”に翻訳されていない
テーマB:場・空間に関する課題	課題④:目的が固定された場しかない 課題⑤:用がないと行けない構造 課題⑥:世代や属性が交わる場が少ない
テーマC:仕組み・制度に関する課題	課題⑦:つながりが“個人の善意任せ”になっている 課題⑧:担い手になると重くなる仕組み 課題⑨:制度が“相談を受ける側”に偏っている
テーマD:人・役割に関する課題	課題⑩:つなげる人が見えにくい 課題⑪:「つなぐ人」になる心理的ハードル
テーマE:動機・感情に関する課題	課題⑫:「つながること自体」が目的になってしまう 課題⑬:楽しさ・食・行事などの力を活かしきれていない 課題⑭:役割があるとつながれるが、役割がなくなると切れる
テーマF:関係性の質に関する課題	課題⑮:強すぎるつながりへの警戒感 課題⑯:「ほどほど」「顔見知り」関係が評価されていない 課題⑰:多様なつながり方を許容する視点の不足
テーマG:機会に関する課題	課題⑱:つながるきっかけ・機会が不足している 課題⑲:ライフステージの変化で機会が途切れる 課題⑳:「最初の一步」を踏み出しにくい構造

テーマA:情報・認知に関する課題

課題①:知らないままになっている

長寿介護やフレイル、自主防災組織といった言葉自体は存在するが、それらが知られていなかったり、自分の生活にどう役立つかまでは浸透していない。制度が暮らしと切り離されたまま放置され、本当に必要な人に支援が届かないままになる懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 体育館に行く ● SNSなどで発信する ● 高齢者のことを知ること
地域でできること	● 自治会館を使って説明会を行う ● フレイルについてまとめたことを資料にしてたくさんの人に送る
行政の役割	● もう少し、使いやすいようなポスターを作ったりしてほしい！ ● その地域の特色などを話す ● フレイルのことをもっとみんなに知らせる

課題②:情報はあがるが、届いていない

回覧板や広報などによる情報発信は行っているものの、「必要な人に、必要なタイミングで、必要な形で」届いていない現状があるため、行政サービスや制度利用の機会損失が生じる懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 体育館に行く ● SNSなどで発信する
地域でできること	● 自治会館を使って説明会を行う
行政の役割	● もう少し、使いやすいようなポスターを作ったりしてほしい！ ● その地域の特色などを話す ● SNSを活用する

課題③:情報が“自分ごと”に翻訳されていない

情報は発信されているものの、受け手の年代や生活環境に合わせて「自分ごと」として翻訳されていない。若者にとっての介護問題や、高齢者のフレイル予防、個別の防災行動などが「他人事」として受け流されてしまい、具体的な行動変容や備えにつながらない懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 災害時の話を「怖い話」ではなく、世間話の延長で共有する ● 備蓄 ● 高齢者のことを知ること。 ● 自宅・家族単位での「ゆるい避難イメージ」を持つ
地域でできること	● 防災イベントを、訓練ではなく交流イベント化 ● フレイルについてまとめたことを資料にしてたくさんの人に送る
行政の役割	● 「危機感を煽る」のではなく、日常に溶け込ませる防災を推進 ● フレイルのことをもっとみんなに知らせる

テーマB:場・空間に関する課題

課題④:目的が固定された場しかない

現状の公共施設は利用目的が固定されており、用事がないと訪れにくい環境となっている。誰もが気軽に時間を過ごせる居場所としての機能が弱いため、自然発生的な井戸端会議や多世代間の接点が消失している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 行事だけの使用ではなく使わせてもらえたら ● イベント参加よりも、日常的な小さな接点を大切にする ● 高齢者と若者が共通に楽しめる場所

地域でできること	● 公民館・集会所を役員会以外の用途で開く時間帯をつくる ● 駄菓子屋・ゲーム・本など、用事のない理由を用意する ● 「管理しすぎない」ことを前提に、緩やかなルールを共有 ● 高齢者と若者が共通に楽しめる場所をつくる。 ● 使えないようになっている公民館や、公園を開放する ● 気軽に立ち寄れる“余白のある場”が必要ではないか
行政の役割	● 偶発的交流のインフラとして再定義 ● 「失敗してもよい運営」を前提とした支援制度設計 ● 土地を利用して、新しい公園を作る

課題⑤:用がないと行けない構造

人々が集まるきっかけが用事や役割に限定されており、それらがなければ他者と関われない状況にある。不便や困りごとが解消された豊かな社会になったことで、かつて存在した「助け合い」や「お互い様」の機会が少なくなっている。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 行事だけの使用ではなく使わせてもらえたら ● なぜ使えなくなったのかを考え、整理する
地域でできること	● 容易に利用できる、システムを作る。 ● 住民の人が使いたいと思ってることを考え、開放する
行政の役割	● システム作りのサポートをする ● 用事がないのに行っていい場所があれば、もっと人と話す機会が増えると思う

課題⑥:世代や属性が交わる場が少ない

子育て世代、高齢者、単身者、集合住宅の住民など、ライフスタイルや属性ごとにコミュニティが完結してしまっている。同じ地域に住んでいながら接点がない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 高齢者と若者が共通に楽しめる場所 ● まず 1人から参加し始める

地域でできること	- 高齢者と若者が共通に楽しめる場所をつくる - 広い世代の人たちが関われるように、直接ではなく、リモートや電話などの、最近の機械を活用する（イベントを開催する）
行政の役割	- 地域内に広場等をみつける 今、地域はどうなっているのかを紙にまとめて、地域住民へ配布する

テーマC：仕組み・制度に関する課題

課題⑦：つながりが“個人の善意任せ”になっている

地域の活動が、たまたまそこにいた「やる気のある特定の人」の頑張りに寄りかかっている。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	- 自治会行事に出来るだけ参加する - 住んでいる地域により差がある。担い手として、元気な高齢者を人的資源として利用する
地域でできること	住民について出来るだけ把握し、理解することが大切
行政の役割	- まずは行政と自治会の関係づくりが重要 - 担い手のリーダー作りのルールを引く。サポートをする

課題⑧：担い手になると重くなる仕組み

民生委員や自治会役員など、一度引き受けてしまうと、その人に仕事が偏ってしまうことがある。そのイメージが強いため、誰も手を挙げられず、常に同じ人に負担が偏り続けてしまう。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	「支援する人」にならなくても、見かけたら挨拶する・気にかける
地域でできること	- 見守りを役割化せず、複数人でのゆるい関わりに分散 「助ける／助けられる」を固定しない文化づくり
行政の役割	
その他	AIを使った「孤立防止のための軽い接点づくり」

課題⑨:制度が“相談を受ける側”に偏っている

苦情・困りごと・要望を受け止める役割ばかりが可視化されている。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 頼ることを「弱さ」ではなく、関係づくりの一部と捉える ● 高齢者自身も「支えられる側」に固定されない
地域でできること	● 世代混在の活動に高齢者が自然に参加できる設計
行政の役割	● 介護・見守りを専門職だけに閉じない制度設計 ● 心理的安全性(頼りやすさ)を重視した施策評価

テーマD:人・役割に関する課題

課題⑩:つなげる人が見えにくい

災害時の調整や日頃の声かけなど、実質的に地域を支えているつなぎ役が存在していても、公的な役職や役割として可視化されていない。そのため、行政や他の組織が連携したくても誰にコンタクトを取ればよいか分からず、その力が十分に活かされない懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 担い手として、元気な高齢者を人的資源として利用する ● 介護や健康の情報を、日常の会話の中で伝えてくれる人
地域でできること	● フレイル予防をしようと地域で呼びかける。 ● 相談を受けるだけでなく、声をかけに行く人が必要ではないか
行政の役割	● 担い手のリーダー作りのルールを引く。サポートをする ● フレイル予防を呼びかける人を当番で決める ● 専門職だけでなく、身近な立場でつなぐ人が必要 ● 災害コーディネーターのような、動ける人が必要

課題⑪:「つなぐ人」になる心理的ハードル

誰かの役に立ちたい気持ちはあっても、「余計なお世話だと言われる」「失敗したら責められる」という不安がブレーキをかけている。「事なかれ主義」になってしまう状況がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	
地域でできること	民生委員はつなぐ役割を期待されているが、負担が大きすぎるので、減らせるとよい
行政の役割	つなげる人を評価・支援する仕組みづくり

テーマE:動機・感情に関する課題

課題⑫:「つながること自体」が目的になってしまう

どのような活動においても、楽しさ・意味・成果が見えないと続きづらいということが考えられる。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	
地域でできること	- 地域活動のやらされ感を減らす - 楽しさや納得感が必要
行政の役割	

課題⑬:楽しさ・食・行事などの力を活かしきれていない

食ること、体を動かすことなどが、最も手っ取り早く人をつなげる手段であるのに、それらが副次的な要素として軽視されている。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	防災訓練よりも先に、顔と名前を知る関係をつくる

地域でできること	● 「誰が要支援者か」ではなく「何となく知っている状態」防災ネットワーク ● 災害時をバーチャルに体験できるような行事？を開催するなど？ ● 食べること、運動すること、行事などは自然につながりが生まれる
行政の役割	● ハザードマップや計画の周知だけでなく、人のつながりを可視化する仕組み

課題⑭：役割があるとながれるが、役割がなくなると切れる

PTA活動や子育て、仕事といった特定の役割を通じてのみつながりが形成されているため、その役割を終えた瞬間に関係性もリセットされてしまう。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 雑談・声かけ・共通の関心事を起点
地域でできること	● 「最近どう？」という近況共有の場 ● 世代混在の小さな場（お茶会・散歩・ゲームなど）をテーマを決め定期化
行政の役割	● 数値目標だけでなく、関係性の有無・参加のしやすさで評価

テーマF：関係性の質に関する課題

課題⑮：強すぎるつながりへの警戒感

密接な地域コミュニティが見守りを超えた監視や干渉として受け取られ、敬遠されている。個人情報流出や私生活への介入に対する不安から、あえて地域との関わりを断ち、個人の自由と匿名性を確保しようと働いている懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	
地域でできること	● お祭や行事など、現代に沿うように変えつつ意識して継続していく

行政の役割	
-------	--

課題⑩:「ほどほど」「顔見知り」関係が評価されていない

ただそこにいて、なんとなく顔を知っているだけの「ほどほどの関係」を肯定する言葉や仕組みが存在しない。「もっと深く関わらないと地域の一員ではない」という無言の圧力が、気軽な交流の芽を摘んでいる。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 困ったときだけ相談できる関係があればいい ● 普段から密につながっていなくても、いざというときに助け合えればいい ● 最低限の情報共有で助け合える関係
地域でできること	● 「役割を担う人」を増やすのではなく、関わりの濃淡を許容する設計
行政の役割	● 制度説明を前面に出すのではなく、生活実感ベースの対話設計(ストーリー化)
その他	● 対話型ワークショップや、ケア×アート／遊びのプログラム提供 ● 高齢者・若者が一緒に参加できる非医療・非福祉型の活動設計

課題⑪:多様なつながり方を許容する視点の不足

地域ごとの特性や、世代間の価値観、個人の性格といった「多様な背景」が考慮されず、一律の活動スタイルが適用されている。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 地域の行事などのときに、できるだけ顔を出す
地域でできること	● 参加の度合いを選べる仕組み
行政の役割	● 関わり方を選べること

テーマG:機会に関する課題

課題⑱:つながるきっかけ・機会が不足している

地域の行事やイベントが縮小傾向にあるか、開催されても参加者が固定メンバーに限られている。日常生活の中で自然に他者と出会う機会が少ない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	自治会行事に出来るだけ参加する
地域でできること	- 住民について出来るだけ把握し、理解することが大切 - 相談するほどではないが、話せる機会 - 自治会行事
行政の役割	まずは行政と自治会の関係づくりが重要

課題⑲:ライフステージの変化で機会が途切れる

仕事や子育てといった特定のライフステージが終了した際、地域社会へのスムーズな移行支援がないため、関係性が断絶してしまう。また、転入や集合住宅への入居時など、新たな環境での接点も生まれにくい。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	まず 1人から参加し始める。
地域でできること	広い世代の人たちが関われるように、直接ではなく、リモートや電話などの、最近の機械を活用する（イベントを開催する）
行政の役割	高齢者が外に出る用事や行き先をつくる

課題⑳:「最初の一步」を踏み出しにくい構造

既存のコミュニティが出来上がっているため、知り合いがいない初参加者にとっての心理的ハードルが高い。継続につながる仕掛けも弱い。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	
地域でできること	● 容易に利用できる、システムを作る。 ● 転入してきた人が地域に入るきっかけ
行政の役割	● システム作りのサポートをする。 ● イベント的な防災体験

田原本町住民協議会 中間取りまとめ ～かせぐ地域づくり～

1.全体の概要

第1回、第2回の会議では、「かせぐ地域づくり」というテーマに対し、まずは住民自身が田原本町の魅力と課題を再確認することから議論が始まりました。当初は「行政がどう稼ぐか」という視点もありましたが、議論が進むにつれて、「稼ぐための土台は、人が住み続けたい・働きたいと思える魅力的な町であること」という共通認識が生まれました。

2.課題と提案の分類

テーマ	課題
テーマA:新たな拠点となる免許センターと駅周辺の活性化	課題①:運転免許センター来訪者の滞在による活性化 課題②:駅東側エリアの衰退と回遊性
テーマB:町内での消費を増やす	課題③:夜間の飲食・消費場所の不足 課題④:若者・子どもが遊べる場所の欠如
テーマC:地域資源の価値を最大化	課題⑤:観光資源(唐古・鍵遺跡など)の活用不足 課題⑥:魅力の「認知」と「発信」の好循環づくり
テーマD:交通・回遊性の向上	課題⑦:町内移動の不便さと「ラストワンマイル」
テーマE:農業の振興と働く場の創出	課題⑧:農業の担い手不足と「稼げる農業」への転換 課題⑨:若者の「働く場」を創出
テーマF:住み続けたい・住みたくなる居住環境の整備	課題⑩:子育て世代が定住できる環境の確保 課題⑪:住民ひとりひとりが活躍する場の創出

テーマA:新たな拠点となる免許センターと駅周辺の活性化

課題①:運転免許センター来訪者の滞在による活性化

年間40万人以上の来訪が見込まれるが、現状のままだと用事を済ませてすぐに町外へ帰ってしまい、経済効果が生まれない懸念がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	- 来訪者に対して、SNS等で「ついでに寄れる」おすすめスポットを発信する。 - 日頃から図書館を利用する。
地域でできること	「ようこそ田原本へ」といった歓迎の意を示すのぼり旗などを設置し、来訪者の気分を盛り上げる。 - 駅前やセンター周辺で、待ち時間に立ち寄れるマルシェやイベントを企画する。
行政の役割	- 図書館に食事できるところや、スタバなど有名カフェを誘致する。 「ラーメン横丁」のような、町外の人も食事目的で訪れたいくなる集客施設・飲食ゾーンを検討・誘致する。

課題②:駅東側エリアの衰退と回遊性

かつて商業で栄えた駅東側がシャッター街化しており、道幅も狭く、駅を降りても立ち寄りたくなる魅力が不足している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	東側の古い町並みの良さを再発見し、雰囲気を楽しむ。
地域でできること	- 商店街の空き店舗を活用し、カフェや民泊など新しい店舗を誘致する雰囲気づくりを行う。 - 自治会やボランティア活動として駅前歩道を活性化させる。

行政の役割	● 駅東側エリアの開発方針(商業地の復活か、静かな居住環境の整備か)について、住民意向を丁寧に確認し決定する。 ● どんな駅前にしたいかアンケートを取ってみる。
-------	---

テーマB:町内での消費を増やす

課題③:夜間の飲食・消費場所の不足

夜8時以降に開いている店がチェーン店に限られ、食事や買い物で橿原市などの近隣市へお金が流出している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 町内のガソリンスタンドや商店を意識的に利用し、地元にお金を落とす。 ● 友人との集まりや外食の際は、町内の個人店を選ぶ。 ● どんな店が増えたらいいか考えてみる。
地域でできること	● 地元の飲食店を利用した「婚活パーティー」などを開催し、店を知ってもらうきっかけを作る。
行政の役割	● 夜間に営業する飲食店の開業支援や、「ナイトマルシェ」のような夜の賑わい創出をPRする。 ● 町内で食事ができる場所をまとめたマップや情報発信を強化する。 ● 空き家などを使ってカフェを開く。

課題④:若者・子どもが遊べる場所の欠如

町内にカラオケやゲームセンター、魅力的な公園がなく、若者や子ども連れが町外へ遊びに行ってしまう。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 町外へ行く前に、町内で遊べる場所がないか探してみる。

地域でできること	子どもたちが楽しめるイベントを企画し、地域内での楽しみを作る。
行政の役割	- カラオケ、ゲームセンター等、若者が楽しめる娯楽施設を誘致・支援し、町内にお金が落ちる仕組みを作る。 - ボールが使える公園がどれだけあるのか調べ、少ない場合は増やす。

テーマC：地域資源の価値を最大化

課題⑤：観光資源(唐古・鍵遺跡など)の活用

資源が点在しておりストーリーとして繋がっていない。また、良い店(醤油蔵など)があっても案内やPRが不足しており、住民も知らないため、外への発信につなげていない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	友人や親戚が来た際に、唐古・鍵遺跡や道の駅、醤油蔵などを案内する。
地域でできること	「卑弥呼」などの歴史的背景を活かした商品・お土産を開発し、のぼり旗でアピールする。
行政の役割	- 吉野ヶ里遺跡のような、歴史体験や復元を含めた大胆な魅力向上策を検討する。 - 歴史資源を巡るツアーや、田原本を起点とした周遊ルートを構築する。

課題⑥:情報発信の強化

良い素材があるのに行政のPRが弱い。また、住民自身が地元の魅力を知らないため、外への発信につながっていない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 地元の食材を食べ、場所を訪れ、その良さを実感する。 ● 実感した魅力を、SNSやリアルな口コミで「自分の言葉」として発信する。
地域でできること	● 口コミで地元の良さを広げ、住民自身がPRマンになる。
行政の役割	● イベントや町の魅力を、まずは住民にしっかり届けるためのSNS等の広報を強化する。

テーマD:町をつなぐ交通・回遊性の向上

課題⑦:町内移動の不便さと「ラストワンマイル」の課題

駅や拠点間の接続が悪く、徒歩や自転車での移動がしにくい。良いスポットがあっても案内が不十分でたどり着けない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 車だけでなく、徒歩や自転車で町を巡り、歩いて楽しいルートを発見する。
地域でできること	● 迷いやすい場所に、地域ならではの手作りの案内や目印を設置する協力を行う。
行政の役割	● 免許センター、駅、観光地をつなぐ分かりやすい誘導看板やサイン計画を整備する。 ● 歩車分離や一方通行化などにより、歩行者が安全に回遊できる道路環境を整える。 ● 町内の「ラストワンマイル」を埋める移動手段やルートを検討する。

テーマE:稼ぐ力を生む「産業基盤」の強化

課題⑧:農業の担い手不足と「稼げる農業」への転換

農業だけでは稼ぐのが難しく、担い手不足や耕作放棄地が増加している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 地元の野菜や農産物をスーパーや直売所で積極的に購入し、農家を支える(地産地消)。 ● 新しい品種や栽培方法に挑戦する若手農家を応援する。
地域でできること	● 農業における「共助」の精神で、地域の農地を守る。
行政の役割	● 農地集約や法人化を手助けする。 ● 空き家バンク等と連携し、農業をしたい移住者を受け入れる体制づくり。 ● 高付加価値な農産物(マンゴーや新品種など)への挑戦を支援する。

課題⑨:若者の「働く場」を創出

町内に魅力的な就職先や新産業が少なく、若者が都市部へ流出しているため、職住近接が叶いにくい。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● ふるさと納税を活用し、田原本の産品や企業を応援する(町外への流出を防ぐ)。
地域でできること	● 地元の企業の魅力を知り、子どもたちに伝える。
行政の役割	● 「田原本リボーンプロジェクト」等を通じたスタートアップ企業の誘致を進め、町内で働ける多様な場所を作る。 ● 古く使われていない家を企業が使えるようにしていく。

	オープンファクトリーなどを通じ、地元の仕事を住民に知ってもらう機会を創出する。
--	---

テーマF:住み続けたい・住みたくなる居住環境の整備

課題⑩:子育て世代が定住できる環境の確保

住みたいと思っても、市街化調整区域の壁などで新しい分譲地が少なく、子育て世代が家を見つけにくい。また、通学路の危険箇所や街灯が少ないといった安全面での不安がある。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	- 近隣住民と積極的に交流し、顔の見える安心なコミュニティを作る。 - 子育てする立場として、こうして欲しいという意見を発信していく。 - 部活の試合が遅くなるときは家の人に送り迎えしてもらう。 - 修繕が必要な道路があれば町に報告する。
地域でできること	- 新しく引っ越してきた住民を温かく受け入れ、地域行事などに誘う。 3世代が交流できるような場づくりや見守り活動を行う。 - 高齢者とこどもをマッチングできる場を使う。 - 信号を無視する車が多いので、「信号無視するな」の看板を立てる。
行政の役割	「近隣市町村で一番子育てがしやすい」と思えるような独自の支援策を打ち出す。 - 空き家のリノベーション支援や建て替え促進により、移住者が住める場所を確保・仲介する。 - 警察と連携して通学路の安全対策を強化する。 - 街灯を増やす。 - 道路の凹凸について、子どもや車いす目線で調査する。 - 民生委員等を有効活用する。

課題⑪:住民ひとりひとりが活躍する場の創出

行政任せではなく、住民自身が「やってみたいこと」を実現できる場や機会が不足している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 旧村は外の人が入りにくく、閉鎖的なので家を開放して新しい風を吹かす。 ● 社協やボランティア団体に協力して、子育て、障がい者、老人との交流の手助けをする。 ● 空き家や公共空間を活用して、自分の趣味や特技を生かした小規模なイベントを企画してみる。
地域でできること	● 新しい挑戦をする人を応援し、参加する雰囲気を作る。
行政の役割	● サロン・コミュニティ活動に補助金などを出す。 ● 駅前広場や空き家バンク物件など、住民がチャレンジしやすい場所を提供・仲介する。 ● 「ナイトマルシェ」やキッチンカー出店など、住民がプレイヤーとして参加できるイベントを継続・支援する。 ● 各種団体を繋げるコーディネーターの役割を担う。

田原本町住民協議会 中間取りまとめ ～未来を育むまちづくり～

1.全体の概要

第1回、第2回の会議にて、10年後の田原本町はどうありたいか、現状に対し何が課題かを中心に議論してきました。「人口減少への危機感」と「次世代(子ども・若者)への期待」が共通の重要事項として認識されており、住宅規制の緩和による居住促進や、働く場所の確保といったハード面の整備と、情報共有の改善や多世代交流の活発化といったソフト面の繋がり再構築が不可欠であるという方向性が示されました。行政に任せきりにするのではなく、自分たち住民が「見守り」や「特技の提供」などでどう関われるか、という「自分ごと」としての視点が多くの提案に盛り込まれています。

【10年後の田原本町はどうありたいか】

第2回では、次期総合計画の最終到達点である「10年後の田原本町のありたい姿」について議論をしました。人口減少への危機感を背景に、「住みやすさ・利便性」と「田原本らしい良さ」のバランスをどう取るかという点や、次世代(若者・子ども・女性)が定着するための環境づくりについて多様な意見が出され、それらを踏まえ、3つの方向性が見えてきました。

1. 子どもたちが安心・安全で、多様な選択を持てるまち

- 物理的な安心安全だけでなく、行政と地域が結びつき、子どもたちが地域の中で多様な大人と関わることで学びを得られる環境。
- 魅力的な公園など、子どもが主役になれる場所があること。

2. 若者・働き世代(20～30代)が定着し、つながれるまち

- 町内に多様な仕事があり、若者が働く場所を選べること。
- 同年代同士がつながれるコミュニティや居場所があり、孤立せずに暮らせること。これが結果として人口維持・増加につながる。

3. 誰もが活躍でき、対話で未来を決めるまち(全てに共通する考え方)

- 性別や年齢に関わらず、多様な人の意見が反映されること。
- 町の進化や変化(利便性と自然のバランスなど)について、行政任せにせず、住民同士の「対話」を通じて納得解を導き出していくプロセスを大切にすること。

2.課題と提案の分類

テーマ	課題
テーマA:誰もが対等に参画できる「多様性・コミュニティ」	課題:自治会や地域の意思決定の場などに多様な年代・属性の参加者が少なく、特に女性の意見が反映されにくい。
テーマB:情報を「届ける・つながる」ための情報発信	課題:行政の取り組みが伝わっておらず、自分に関係があると思えない。
テーマC:学校と子育て世帯、地域が手を取り合う「教育・子育て環境」	課題:学校や子育ての場に地域の大人が関わりにくく、親世代も孤立しやすい。
テーマD:子どもが主役の「魅力的な遊び場づくり」	課題:子どもたちの遊び場の選択肢が少なく、既存の場所は魅力的なものになっていない。
テーマE:若者の夢を応援する「地元産業・キャリア教育」	課題:町内に働く場所が少ない。選択肢の提供として中学生以下の職業体験の機会が不足している。
テーマF:人を呼び込み、定住を促す「住まい・土地利用」	課題:市街化調整区域などの制限により住宅が増えず、若者の居住可能な場所が少ない。
テーマG:その他	課題:分科会テーマ以外の田原本町全体に対する課題

テーマA:誰もが対等に参画できる「多様性・コミュニティ」

議論の概要:10年後、魅力的な田原本町になることを考えたときに、まちづくりや地域の方向性を決める際には、対話を重ねてみんなが納得する答えを導き出す「プロセス」をこれからは大切にすることが重要という意見がありました。また、自治会や地域の意思決定の場における役員の固定化や男性への偏りといった現状があり、「女性が住みやすい町は結果として全ての住民にとって住みやすい町になる」という視点が共有されました。アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)を自覚し、性別や世代を問わず新しい人が参画しやすい空気感を作ることが必要とされています。さらには、多様な価値観を認め合い、例えば、農業体験などを通じたゆるやかな交流を積み重ねることで、一人ひとりに居場所がある温かなコミュニティの醸成に繋がり、交流の場が子どもたちにとって多様な価値観を得る場になりうるということが議論を通じて示されました。

課題:自治会や地域の意思決定の場などに多様な年代・属性の参加者が少なく、特に女性の意見が反映されにくい。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 課題提起することで世代をまたぎ町民との議論を促す。 ● 農業を通じて色々な年代と関わる。 ● 無意識の偏見を自覚し、新しい人の参加を歓迎する。 ● 自治会などで女性が発言しやすい環境を考える。 ● 対話を通じて価値観に共通する点を見つけようとする。 ● 自治会行事やイベントにできるだけ顔を出す、参加する。
地域でできること	● 利便性追求により生じる不都合や、失われかねない事象が無いかなど、地域課題を自分ごととして思案する時間をつくる。 ● 高齢者と子どもだけでなく、20～40代も含めた多世代が関わり、子どもが「田原本にはこんな人がいる」と知れる機会を増やす。 ● 農業体験のチラシを作って回覧板に載せるなど、共通の目的で多世代が集まれる場を作る。 ● 農業を通じて磯城野高校と地域の繋がり場の場づくりを試みる。 ● 日常の挨拶はもちろん、溝の掃除など世代を越えて町民が交わる場を契機に、対話する機会を設ける。 ● 自治会未加入者に自治会費を「払え」と迫るのではなく、「払ってみようかな」と思えるような関係性を時間をかけて作る(ギスギスしないまちづくり)。

行政の役割	● 自治会、審議会などへの女性登用促進を行う。 ● 住民の「やりたい」を支援する仕組みを作る。 ● 施策や事業の実施にあたって、対話を通じて納得感のある答えを出すプロセスを大切にする。また、その時間を捻出する。 ● 農業体験など、様々な人の繋がり場づくりに対して経費や物品のサポート体制を作る。
その他	● 子どもや色々な年代層の人が農業をすることで自然に沢山触れられて、子どもの場合は外で遊びたいと思えるようになるのではないか。その子どもの姿を見て、子育てがしやすい町と思える人が増えると思う。

テーマB:情報を「届ける・つながる」ための情報発信

議論の概要:「行政は情報を発信しているが住民に届いていない」というミスマッチが課題として明らかになりました。行政からの通知や回覧板が事務的で、自分に関係があると感じにくいという指摘があり、受け手の目線に立った工夫が求められています。具体的にはSNS(LINEやInstagram)の戦略的な活用による若年層へのアプローチ強化や、回覧板のデザインを直感的に「面白そう」と思えるものへ改善するなどのアイデアが出されました。また、情報を一方的に流すだけでなく、住民からの提案や意見箱への投稿に対して、検討結果や進捗を丁寧にフィードバックする「双方向のコミュニケーション」の重要性も議論されました。住民自身も、自ら情報を取得し周囲に広める「情報の結節点」としての自覚を持ち、行政と住民が対等なパートナーとして信頼関係を築ける仕組みづくりが必要です。

課題:行政の取り組みが伝わっておらず、自分に関係があると思えない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 行政のしていることを少しでも知ってみる。 ● 地域の色々な年代の人と関わってみる。 ● 広報誌を読む。ホームページを見る。 ● 自分の住んでいる地域のことを把握する。自治会の行事などに積極的に参加する。 ● 情報を自ら取りに行き、周囲に「こんなのがあるよ」と教え合う。(自分が得た情報を地域の人に共有する)

地域でできること	● 口コミで活動の楽しさや募集情報を広める。 ● 回覧板や掲示板の見出しを「面白そう、楽しそう」と思えるものにする(イベントや交流会に参加したくなるように)。 ● 公民館前の掲示板や回覧板を活用する。 ● 自治会などによる地域のつながりの大切さを知ってもらう。どうして自治会に入りたいくないのかなどの意見の集約も行う。 ● 若い世代が興味を持つデザインにする。 ● 行政が動くのを待つのではなく地域で動いてみる(地域で一つになるのが難しいなら小さな区域で一つになってみる)。
行政の役割	● 若者層、子育て層が使いそうなSNSを使って情報を伝える(LINEやInstagramなど世代に応じた発信を行う)。 ● 紙媒体(チラシ・回覧板)にQRコードを掲載し、スマホで詳細情報へ誘導しやすくする。 ● 説明がなくても、直感的に欲しい情報にたどり着けるようHPを見やすくする。 ● 広報誌の配色やレイアウトを見やすく工夫する。 ● 回覧板なら家族が見るので、その見出しを面白そう、楽しそうと思える内容にする。 ● 公民館や役場にはあまり行かないのでスーパーや駅など目につくところに情報を示す。 ● 一方通行ではなく、意見に対するフィードバックを確実に行う。 ● 公民館活動を活発にしたい、新たなメンバーを増やしたいと考えている団体の紹介。(楽しそうと思える情報を出す) ● 公民館活動団体への入会・見学申し込みなどを運営個人のみに任せるのではなく、窓口を設置する。

テーマC：学校と子育て世帯、地域が手を取り合う「教育・子育て環境」

議論の概要：教育と子育てを巡る議論では、学校と地域の距離感の解消がテーマとなりました。防犯対策の強化により、かつてのように地域の大人が気軽に学校に関わるのが難しくなっている現状に対し、住民の豊かな経験や特技を教育現場に活かす「開かれた学校」の方向性が考えられます。具体的には、登下校の見守りだけでなく、授業のサポートや部活動の指導など、住民が「自分にできること」で貢献できる仕組みづくりが提案されました。また、子育て世帯が地域の中で孤立しないよう、公民館を親子の居場所として開放したり、他世代と交流できる場を増やしたりといった、預かりボランティアに参加するなど町全体で子どもを育む文化の醸成が重要視されています。一方、行政の重要な役割として、住民が関わる際の責任と負担の不安を解消するため、学校、子育て世帯(子ども)、住民の双方向の信頼や関係性を構築するための仕組みづくりを行う必要があります。

課題①：学校や子育ての場面に地域の大人が関わりにくく、親世代も孤立しやすい。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 登下校の見守りを行う。 ● 定年後、保育士資格をいかして子育て広場や預かりボランティア等に参加する。 ● 自身の特技(野球、読み聞かせ、ミシン等)を授業等で提供する。 ● 公民館の行事に参加する。 ● 「何かあったらお互い様」と言える関係づくりを、挨拶や立ち話から始める。 ● (関係性ができた上で)近所の子どもを一時的に預かるなど、無理のない範囲で手助けを行う。
地域でできること	● 自治会の公民館を、子育て広場ができるように提供する。(自治会以外の方も参加できると良い。) ● 町内に親族がいる人もいない人も「1人で子育てしなくていい、地域で子育てする田原本町」をアピールしていく。 ● いきなり役割を求めるのではなく、信頼関係を築くための「お見合い」のような交流の場(お茶会、イベント)を設ける。 ● 「助けてほしいこと」を具体的にわかりやすく発信する。 ● 地域の里親制度の実施。 ● 元教員の方などを講師にして、田原本町のよさ、歴史を感じられるフィールドワークの実施(できれば春夏秋冬1回ずつ)。

行政の役割	● 活動に伴う責任(事故や怪我)に対する保険や制度を整備・周知し、住民の不安を取り除く。 ● ピンポイントではなく、プレママパパ教室や離乳食教室などの段階から、地域の人と子育て世帯が顔見知りになれる機会を作る。 ● 「ファミリーサポート制度」等の公的な仕組みと、地域の助け合いを接続する支援を行う。 ● 子育て広場だけでなく、親と子の絆づくりプログラム(BPプログラム)などで、子育て世帯がつながるきっかけを提供する。 ● 学校と住民のボランティアを繋ぐコーディネートを行う。 ● 専門家でなくても関われる「隙間」のボランティア募集を具体的に発信する。 ● 「誰でも通園制度」の利用率や、子育て広場が徒歩圏内にあるなど、具体的にPRする。 ● 上記フィールドワークの情報収集、講師依頼。
-------	--

課題②:子どもの権利や人権などの理解の深まり

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 人の話を受け止めて聴く、できていることを伝える。 ● 周りの人を大切にする。自分も大切にする。
地域でできること	● 人権に関するポスターを公民館や掲示板、町内のスーパーなど、人の目にとまるところに貼る。(地域の子どもの絵を貼ることに意味があると思う) ● 子どもが学校で学ぶ人権教育を地域のおとなも知って、共通認識にする。
行政の役割	● 学校を子どもが安心できる場にする(不登校の児童や加害児童等の背景にある家庭環境の確認・支援)。 ● 暴力防止、生命の安全教育、デートDV予防などを専門のNPO等に依頼して実施する(予算は赤い羽根やPTA会費活用も検討)。 ● スクールカウンセラーやSSW(スクールソーシャルワーカー)の充実。

テーマD:子どもが主役の「魅力的な遊び場づくり」

議論の概要:子どもたちの健やかな成長を支える公園や遊び場の現状について、多くの課題が見つかりました。例えば、公園は遊具の老朽化や雑草の繁茂などが目立ち、子どもたちが進んで遊びたいと思える環境ではないという意見がありました。「今の公園はスマートフォンやゲームの魅力に負けている」という指摘もあり、単に維持管理するだけでなく、子どもや親がワクワクするような魅力的な空間への再生の必要性が挙げられました。住民として行政任せにせず、自分たちで草引きや見守りを行いたいという前向きな意欲も示される一方で、清掃で出たゴミの回収など、行政によるバックアップ体制の構築も求められました。多世代が自然と集まり、安心して交流できる「自慢の遊び場」づくりが、地域のつながりを深める鍵となります。

課題:子どもたちの遊び場の選択肢が少なく、既存の場所は魅力的なものになっていない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	- 子どもを連れて公園に行き、気づいたゴミを拾う。 - 子どもや甥・姪、その友達と一緒に公園で遊び、何が必要か(魅力か)を考える。 - ラジオ体操などを公園で行い、スタンプカードなどで子どもが集まるきっかけを個人レベルでも企画してみる。 - 公園の除草などの清掃ボランティア。 - 公園の場所、広さ、ボール使用の可否などを把握する。
地域でできること	- 地域の人と協力して除草をしたり、綺麗な花を植えてみるなど。 - 公園清掃ボランティアのグループづくり。 - こどもの見守り。 - 公園でできる遊びのイベント。
行政の役割	- 遊具の点検、樹木の整備、錆びた遊具の修繕・更新。 - 清掃で出たゴミの回収、引き取りの仕組みづくり。 - ボール遊びができる場所として、ボールが飛んでいかないネットで囲われた公園を整備する。 駅、学校に道の駅からの直通バスの誘致及び公園への歩道橋の建造を行う。

テーマE:若者の夢を応援する「地元産業・キャリア教育」

議論の概要:若者の流出を防ぎ、町に活力を呼び込むためには、魅力的な雇用と早い段階からのキャリア教育が不可欠との議論がされました。町内には働く場所が少なく、就職を機に町を離れてしまう現状に対し、企業誘致の促進やスマート農業の支援など、多様な働き方の選択肢を増やす必要があるという意見がありました。子どもたちへのキャリア教育についての提案として、「地元の企業や大人の働く姿を知る機会が少なすぎる」という現状に基づき、中学生だけでなく小学生の頃から地元の商店や工場で職業体験ができる仕組みづくりが望まれました。住民や地域企業が積極的に協力して、子どもたちが「田原本には面白そうな仕事がある」「この町で働きたい」という誇りと夢を持てる環境を整えることが、持続可能なまちづくりの土台になります。

課題:町内に働く場所が少ない。選択肢の提供として中学生以下の職業体験の機会が不足している。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 地域の仕事や大人の働く姿を子どもに見せる。 ● 農地の草引き等、農業を助ける形での体験を募り、受け入れる。 ● ドローンなどの新しい技術を農業や地域活動に取り入れてみる。
地域でできること	● 農家と住民が出会える交流の場をつくり、双方のニーズ把握やお手伝いへの発展を促す。 ● 地域特産の「大和野菜」などの文化を継承・PRする。 ● 収穫した野菜を使って地域で料理交流会を開く。 ● 農家や商店、工場、企業などが積極的に職業体験を受け入れる。
行政の役割	● 企業や大学の誘致を行う。 ● スマート農業(ドローン活用等)への支援を行い、若者が興味を持つ農業を推進する。 ● 若者や女性が「田原本で働きたい・起業したい」と思えるような産業振興などを行う。 ● 職業体験を中学校の1回だけでは希望の仕事を体験できないため、小学生からできるようにする。

テーマF:人を呼び込み、定住を促す「住まい・土地利用」

議論の概要: 将来人口が減少する見通しに対し、市街化調整区域や住宅規制により「住みたくても家を建てる場所がない」という現状が明らかになりました。一方で、単に開発を進めるだけでなく、田原本らしい田園風景や落ち着いた雰囲気を守りつつ、若い世代が定住できるよう若者向けの補助メニューや空き家の活用といった具体的な支援策の充実も不可欠であるとの認識も示されました。また、住宅支援だけでなく、田原本町に魅力を感じてもらうための取組みとして、歴史・文化遺産や近代発展での先人たちの尽力など、町の歴史をPRすることで田原本町に魅力を感じてもらうことも必要との意見がありました。

課題: 市街化調整区域などの制限により住宅が増えず、若者の居住可能な場所が少ない。

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 空き家の情報提供をする。 ● 自分が住んでいる地域に関心を持ち、歴史に触れ、魅力ある町であることを友人・知人に話す。
地域でできること	● 土地の提供や活用について、地権者と地域で話し合う。 ● 古くから地域に住まうご高齢者から、地域にまつわる歴史を掘り起こす文化継承の機会を持ち、「田原本町が好き」という気持ちにつなげる。 ● 地域の美化(住みやすい雰囲気)
行政の役割	● 住宅規制(市街化調整区域)を緩和する。 ● 若い世代が住み続けられるように、家を購入・新築した場合の補助制度などを作る。 ● 公共施設を活用し、人を呼び込む拠点にする。 ● 子育て支援(資金面) ● 町民が自分の住まうまちの歴史に気づき、更に学ぼうと思う状況を醸成する(シビックプライドの醸成)。

テーマG:その他

概要: 本分科会テーマ以外においても改善提案シートに記載された、田原本町全体に関わる課題を整理したもの。

課題:ごみ・環境美化

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 自宅周辺や散歩コース(土手など)のゴミ拾いを行う。 ● 水路の清掃を行う。 ● 看板等で注意喚起する。
地域でできること	● 地域の美化(住み易い雰囲気づくり)。 ● 「ゴミが落ちていない」など、住んでいて良かったと言える町を目指す。 ● 堤防に花を植えたり、雑木を切ったりして景観を守る活動を行う。 ● 看板等で注意喚起する。
行政の役割	● 河川敷などの広範囲の清掃について、ボランティアと専門委託(シルバー人材等)を組み合わせる。 ● 泥・泥のついたゴミの引取り(個人でも)。

課題:町のイメージ・消費・利便性

	解決・改善に向けた提案
個人でできること	● 町の行政が何をやっているのか知る。 ● 町内の良いお店を調べる。 ● 都会化していないことで、静かに過ごせる事をポジティブに捉える。 ● 交通の便が良いことを住みやすさとしてPRする。
地域でできること	● 「田原本は何もない」というイメージを払拭し、ゴミが落ちていないなど「住んでいて良かった」と言える町を目指す。 ● 町内のお店のマップなどを作る。 ● 田舎のゆっくりした生活を残しつつ、消費を活発にしていく。
行政の役割	● 物価高対策の支援と合わせて「地域振興券」を出す(町内消費の促進)。 ● ふるさと納税の返礼品を魅力化する(「田原本といえば!」という目玉商品)。 ● 田原本駅周辺の道幅拡張や商業施設の整備を検討する。